

一 親友の転校

大輝^{だいき}が遠くの町へ転校していったのは、夏休みの終わりだった。

一年生のころから、二人は毎日のように河原^{かわら}でキャッチボールをした。大輝の投げる球は、いつも少しだけ高くういた。最後の日、大輝は使い古したボールを翔太^{しょうた}にほうつてよこした。白い皮に、大輝の字で「またな」と書いてあった。

それから翔太は、河原に行かなくなった。ボールはつくえの引き出しのおくに入れたまま、一度も出さなかった。教室で大輝の席を見ないように、授業中は窓の外ばかり見ていた。夜、ふとんに入ると、グローブにボールが入るときの音を思い出して、なかなかねむれなかった。

十月に入ったある日、学校から帰ると、げた箱の上に手紙が置いてあった。ふうとうの字を見て、翔太はランドセルをせおったまま、それを開けた。

「こっちでも野球チームに入った。キャッチボールの相手もできた。でも、おまえみたいにまっすぐな球を投げるやつはいない。あのボール、なくすなよ」

翔太は手紙を二回読んだ。手紙を持つ手に、少し力が入った。大輝が元気なのはうれしい。けれど、大輝の球を、今はだれかほかのやつが受けている。うれしいのか、さびしいのか、自分でもよくわからなかった。

翔太は自分の部屋に行き、引き出しを開けた。ボールは、しまったときそのまま、おくのほうに転がっていた。手に取ると、思っていたより軽かった。

夕方、翔太はボールを持って、一か月ぶりに河原へ行った。

川の水は夏よりも細くなり、土手のすすきが風にゆれていた。夕日が水面を赤くそめて、遠くで鉄橋をわたる電車の音がした。

二人でいつも使っていた、コンクリートのかべの前に立つ。

翔太はボールを投じた。ボールはかべに当たって、ぽんと手元にもどってきた。もう一度投げる。また、もどってくる。少しうき上がって返ってくる大輝の球とは、まるでちがった。

「……なくすわけ、ないだろ」

翔太は小さくつぶやいた。その声は、川の音にすぐ消えた。

翔太はもう一度、ボールを投じた。今度は、大輝がいつも立っていたあたりをねらって、少し高く。ボールはかべの上のほうに当たって、翔太の頭の上をこえ、草むらに落ちた。翔太は草をかき分けて、それを拾った。

何度も投げているうちに、空の色がこくなっていった。大輝はもう、ここには来ない。そのことが、さつきよりも静かにむねの中におさまっていた。

翔太はボールの「またな」の字を親指でなぞってから、ポケットに入れた。そして、暗くなりはじめた土手の道を、ゆつくりと歩いて帰った。

一 親友の転校 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

二 祖父の死

おじいちゃんが亡^なくなったのは、まだ梅雨^{つゆ}のころだった。急に入院して、それから二週間もたたないうちのことだった。

夏休みに入ると、お母さんがカレンダーを見ながら「お盆^{ぼん}には、おばあちゃんの家に行こうね」と言^いった。

「わたしは、いい。宿題があるから」

お母さんは何か言いかけて、やめた。本当は、宿題なんてほとんど終わっていた。あの家のえんがわに、おじいちゃんがい^いない。それを見るのがこわかった。えんがわでいっしょにスイカを食べたことも、つりに行ったことも、思い出すと苦しくなるだけだった。

その夜、わたしはアルバムを本だなのおくにしまった。えんがわでおじいちゃんとスイカを食べている写真が、はつてあるアルバムだ。

十一月のはじめの日曜日、わたしはやつと、おばあちゃんの家に行った。お母さんに、柿^{かき}を取ってきたとたのまれたからだ。電車の窓から見える田んぼは、もう稲^{いね}かりが終わって、茶色い土が広がっていた。

門を入ると、庭の柿の木に、だいたい色の実がたくさんなっていた。えんがわには、ぎぶとんが一ま^いだけ出ていた。

「葵^{あおい}ちゃん、よく来たね。今年も、こんなに実がついたのよ」

おばあちゃんは物置から、長い高ばさみを出してきた。持つところが、おじいちゃんの手のおぶらで黒く光っている。

「おじいちゃんの代わり、たのめるかな。おばあちゃんじゃ、とどかないのよ」

わたしはだまってうなずき、高ばさみを受け取った。思っていたより、ずつと重い。うでがふるえて、先がふらふらとゆれた。去年までは、おじいちゃんがうしろから支えてくれていた。

えだの根元をはさんで、手元のひもを引く。ぱちん、と音がして、柿がかごに落ちる。一つ取るたびに、おじいちゃんの「うまいぞ」という声が聞こえる気がした。なつかしくて、うれしくて、それなのにむねのおくが痛^{いた}かった。

さいごに、木のいちばん上に一つだけ実が残った。

「それは鳥の分。おじいちゃん、いつもそう言^いってたね」

おばあちゃんが目を細めた。その目のふちが、少しだけ赤かった。わたしは高ばさみを下ろして、その一つを見上げた。

西にかたむいた日が、残った柿を、ともしびのように赤く照らしていた。

おじいちゃんは、もういない。それでも、柿の木は今年も実をつけた。わたしは高ばさみを、おじいちゃんがい^いつも置いていた物置のかべに、そつと立てかけた。それから、えんがわでおばあちゃんとな^ならんで、取ったばかりの柿を食べた。柿は、去年と同じあまい味がした。

二 祖父の死 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。